



加夏子の後ろ姿に何の言葉もかけられなかった九十九は、額に深い皺を寄せてゆっくりとICUへ向かう廊下を歩いていた。

こういう時、精神科ってのは無力だな  
いや、例え専門医でもこのケースじゃ…

溜息をついて角を曲がった彼の足が止まった。  
入り口の脇に、人影がひとつ。  
長身が陽炎のようにゆらいでいた。

「あなたは…」  
「お前か」

ICUのドアを睨み、振り向きもせず堀川烈はボソリと答えた。

「何もせんよ。そう身構えるな」

言われて九十九は、無意識に構えをとっていた自分に気付いた。

「ハハ。お恥ずかしい」

頭を掻き、苦笑しながら構えを解いた。  
それ以上近付きもしなかったが。

「来ちまったな、この日が」  
「…」

「2年前、殉をここへ転院させた。それからすぐ俺は日本を離れ中東へ飛んだ。殺しても殺してもケリのつかない泥沼の戦場で、頭に浮かぶのはいつも弟の事だった」

「中東…イラク、ですか」

「砂の海に片目を落としてきたよ」

そう言うと、堀川は初めて九十九の方へと顔を向けた。

「出ようぜ、センセイ。先客がいるようだしな」

顎をしゃくって堀川が歩き出す。

脇を擦り抜ける時、微かに触れた腕に電流が流れたような気がして、九十九は小さく身震いをしながら後をついていった。

◇

ひとしきり医者と看護師がばたばたと走り回った後、ICUの中は唐突に静かになった。

規則正しく、低く鳴る機械のモニター音。

横たわる殉の表情が心なしに穏やかになったような気がして、加夏子は外に出てきた医師にかぶりつくように尋ねた。

「せんせい！　じゅんはどうなったんですか！？　たすかったの？　せんせいっ！！」

「血圧と心拍数は正常値近くまでできています。チェーンストークも収まったし、バイタルは落ち着きつつある。危ない所は抜けたようです」

医師は意味のよく判らない言葉を口にした。

「じゃあ…じゃあ、殉はもう大丈夫なんですか？」

「今のところは。色々な臓器に障害が出てきています。MOF（多臓器不全）の初期から中期と診断して間違い無いでしょう」

「それじゃあ」

「残念ですが、小康状態はそう続きません、。あと一週間か…二週間か…」

医師が目を伏せた。

◇

病院裏の雑木林。

まだ日も高い時間だが、この辺りは木々が立て込んでいて関係者でも滅多に立ち入ってこない場所だった。その小道を二人の男が歩いてゆく。

堀川と九十九。

少し離れて進める互いの歩みに、張りつめた空気がまとわりついていた。

どちらともなく足を止めたのは、木立越しに病棟の屋上がやっと覗いている辺りだった。

階段の踊り場ほどの空き地。ゆっくりと堀川が振り返った。

「おあつらえむきだ」

「…」

「あのときはうまく煙に巻いてくれたな、センセイ」

「やるのですか、ここで」

愚問と知りつつ、九十九は足場を確かめながら聞いた。

「楽しみにとおいたよ」

堀川が背の鞘から山刀を抜いた。

冷たい光を放つ刃を脇に垂らす。

「今日は勘弁って訳にはいかないんですかね」

「ぬかせ」

口をV字につり上げ堀川が笑いかけた。

笑みが凍った。

魔法のように九十九が目前に立っていたのだ。

一瞬の間を盗み距離を詰めた彼の歩法はまるで瞬間移動だった。

下段から擦り上げた山刀と九十九の拳が交錯した。

弾き飛ばされるように二人が飛びずさる。

どちらも膝をついていた。

堀川も九十九も、合わせ鏡のように胸を押さえている。

九十九の白衣の胸元が朱に染まっているのだけが違っていた。

「…やりますね、一本とられましたよ…」

「いまのは…何だ？ 真山と違うな」

「先輩より勉強してますから」

ふらつきながら九十九が立ち上がった。

「さっきの構え、無形の位（むぎょうのくらい）ですね。柳生新陰流ですか」  
「合気にこんな強烈な当ては無い筈だが」

堀川も立ち上がる。

「貴方と親戚筋ですよ。心眼流です」

柳生心眼流。

帯刀を前提とした日本古流体術の中で異彩を放つ流派。

激しい突き蹴りはまるで中国拳法のそれを思わせるものだった。

「わざとセラミックに当てたな。余裕かましやがって」

言って、堀川がひとしきりむせ込んだ。

彼の胸と脇腹には外科手術でセラミック装甲が埋め込まれていたが、九十九の打撃の威力はそれを貫通しダメージを与えていた。

「甲冑武者の中身を壊す。『鎧通し』という秘技なんです。タフなひとだ」

「面白い奴だな、オマエ」

ゆらぐ堀川は刃を逆手に持ち変えると、すっと背の鞘へ収めた。

「今日はここまでだ」

「助かります。今は他にやらなきゃならない事がありますから」

少しの間対峙した二人は、やがて静かにその場から立ち去っていった。

◇

ここ、どこだっけ？

殉はゆっくりと目をあけた。  
微かな期待が形になる。

「おはよう、じゅん」  
「カナ…」  
「そろそろ起きるかな、って。見にきたよ」  
「いつ？」  
「さっき」  
「目のした黒いよ」  
「え？」

加夏子は慌てて両目の周りをゴシゴシと擦った。

「ねて、ないんだね」  
「だ〜いじょうぶ！ ジュンだってもう全然へーきだって先生も言ってた、あしたになったら散歩だってできちゃうよ」

おどけた顔で両手をはたはたさせながら、加夏子は笑ってみせた。

「ワタシ深刻になり過ぎちゃってさあ、なんか気まずくてジュンと面と向かって話せなかったけど、しょうがないよね？ いきなり歩けるようになったし、ジュンや北山さんやヨシオは大怪我しちゃったし、碧ちゃんはあるな目にあっちゃったし、フツウひいちゃうよね？ ジュンだっけそう思うでしょ？ ねっ！ それでワタシさ…」

堰を切ったように喋りまくる加夏子の顔を、殉は微笑みながら黙って見ていた。  
それから10分程しても、彼女の話は止まらなかった。  
話題はありとあらゆる方向へと飛んだが、加夏子は3つだけ決して触れなかった。

衣笠恵美子のこと。  
殉の兄、堀川烈のこと。  
そして殉の病状のこと。

「カナ」  
「え？ なになに？ それがさあモウおっかしいのよ！ パパがね…」  
「僕、あとどれくらいだっけ？」

怒濤のお喋りがピタリと止まった。

「ありがとう。元気づけようとしてくれて。でも自分の事ぐらい判ってるよ、いくら僕がニブくてもさ」  
「…あと…1週間か2週間…かもって…」

止まった時の滑稽な姿のまま話す加夏子の声は、別人のようにかすれていた。

「カナが来たって、碧ちゃんが『心の声』で教えてくれた時、ボクは必死に願った。あとチョット、あとほんの少しでいい、生きていたい、カナと話したいって。そしたらね、聞こえたんだ。僕の『声』が」

話していた時の勢いそのまま宙に挙げていた腕をおろし、加夏子はゆっくりと殉に向き直った。

「ジュンが、ジュンの声を？」

「うん。『あと少し、ここにいてもいいよ』って。不思議だな」

加夏子はもう何も言わなかった。

ベッドの殉に覆い被さり…